

国際キャリア学部授業での言語学的視点の位置付け

大里 泰弘

- 0. はじめに
- 1. 言語と社会
 - 1.1 言語分析
 - 1.2 言語とルール
- 2. ダイクシス— むすびにかえて

0. はじめに

学部開設3年度目となる2016年度より Japan Studies B (Culture) の担当授業を開講した。シラバスでの教育目標として「日本語」という言語学的視点からさまざまな文化・社会的現象を検証する」ということを記載した。留学生だけではなく日本人学生をも履修対象とすることから、「自文化あるいは他文化に関して、コトバを出発点としてこれまで意識をすることがなかった身の回りの出来事などを意識して、比較対象を試みるなどしながら、広義の「文化」に対する科学的洞察眼を養ってほしい」ことを付け加えた。日々の日常生活は言語にあふれており、そして今われわれが生活している日本には日本語を通してさまざまな社会制度や思考、慣習、決まりごとが存在している。そうした文化的要素をどのような切り口から考えればよいかを受講者一人一人が身につけてほしい、という思いがある。

Japan Studies の下地としては留学生を主対象とする「日本事情・日本文化」がある。そこで扱われるおもな領域・トピックは次のようなものである^[4]。

- i) 対人関係：あいさつ・呼称・上下関係・ウチ・ソトの関係
- ii) 生活：住居・ファッション・食・趣味・娯楽・職業・家族・時間
- iii) 社会システム：交通・生活インフラ・通信・メディア・学校・金融・医療・行政・社会ルール
- iv) 習慣／慣習：礼儀・冠婚葬祭・年中行事・贈答

- v) 伝統／芸能：茶道・華道・書道・伝統芸能・スポーツ・サブカルチャー
- vi) 社会／人文：政治・経済・教育・歴史・宗教
- vii) 自然環境：地理・気候

見て分かる通り「国語・算数・理科・社会」すべてにわたる学際的な科目であり、総合科目としてのJapan Studiesでそれらを貫く考察の方向性を提供できればとも思っている。

初年度はロング／大橋著『日本語からたどる文化』を参考テキストとして「言語メッセージと非言語メッセージ」「見える文化と見えない文化」「日本語の現在」を大肢として〈人間関係〉〈空間〉〈敬語〉〈食〉〈茶〉〈スポーツ〉〈法〉〈言葉のゆれ〉などをトピックとして取り上げた。担当をおえ2017年度のシラバスを書くころには「言語と社会組織技術としてのルール」という巨視的なテーマが大きくバックボーンとして姿をあらわすようになっていた。

「言語から文化を見る」というスタンスをとるにしても国際キャリア学部の学生にとって関心・活躍の場は、言語学専攻学生のそれとは違い言語そのものの世界というよりは政治、経済、文化が複雑に入り混じる市民社会やビジネス社会であるだろう。日本人か留学生であるかを問わずJapan Studiesという日本語事情の科目学習を通して社会の切り取り方を身につけてくれればと思う。

大学基盤教育では、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義される^[1]。

学生が将来への目的意識を明確に持てるよう、職業観を涵養し、職業に関する知識・技能を身に付けさせ、自己の個性を理解した上で主体的に進路を選択できる能力・態度を育成する教育である。

以下、日本（の教育）事情という観点から論を進めるが、これもまた様々な文化・社会事情にある留学生にとっての一日本事情学習の場となればと思う。

1. 言語と社会

「答申」が強調したことは社会や職業とのかかわりを重視しつつ教育の改善・充実を図るようにするということである。答申のコンテキストではないが入試国

語については次のような指摘がある。

近年になって高校の国語教科書で取り上げられる評論は、「現代」の抱える諸問題を整理したり、解決策を示したりするために書かれた文章が目立って多くなってきた。つまり、現在の「高校国語」はほとんど「社会科」のような役割を果たすことが求められているわけだ^[2]。

「高校国語」とあるが、これは大学入試国語および英語入試にも当てはまる。ちなみに、センター入試英語問題集^[8]をのぞくと、先に挙げた日本事情の取り上げ範囲と同じく「歴史・文化・言語群」「政治・経済・社会群」「自然・科学群」という大枝の中から、「時間節約機器による労働時間増大と余暇激減」「時計の計り方の移り変わり」「人が嘘をつく5つの理由」「仕事を持つ女性と育児休暇」「人力で世界一周を目指す男」「環境保護に対する真の意識改革」「イースター」「ロボットの未来」「人の笑いはいつ起きるか」「茶の歴史と特徴」「日本の風土・気候と日本人の国民性」「デジタル放送への移行に関する説明の不满」「スラム街の持つ残酷な皮肉」「メキシコシティーにおける水不足」「水の力」「企業の規模とは」をタイトルとする英文・設問が配されている。

端的に言語科と社会科の学際化という姿がそこに顕現している。記述言語学に代表される純言語学と社会言語科学の対比を取り上げるまでもなく、言語学専攻者は、キャリア専攻学生との学習において言語学習の重点は抽象的言語体系を主対象とするミクロ言語学から人間社会体系の中でいかに言語が機能しているかを取り扱うマクロ言語学へと移っていることを特に意識しておく必要があるということになる。

1.1 言語分析

学生時代に所属した言語学講座研究室では筆者が進学する数年前から教授陣を巻き込んで「カツ」と「フライ」の意味の違いが論じられてきたという経緯があった。授業や会食の席で「豚、鶏や牛の肉料理はカツだが、海老や牡蠣はフライである、それはなぜか」という公案が与えられ禅問答よろしく意味論実習が始まったものである。

香辛料をのぞいた「とんかつ」の基本食材は〈豚肉 小麦粉 卵 乾燥パン粉〉であり、「エビフライ」のそれは〈エビ 小麦粉 卵 乾燥パン粉〉である。用いる食肉が異なるだけである。

日本食の調理法はまず《生》か《加熱》かの二項対立として弁別されたうえで、

加熱料理に関する動詞は次のように三大別される。

- (1) 熱だけを用いる：ヤク アブル イル
- (2) 油以外の液体を用いるもの：ニル ユデル タク
- (3) 油を用いるもの：アゲル イタメル

辞書（三省堂「国語辞典第6版」）の記述に「揚げる…煮立った油の中に入れて、調理のための熱をくわえる。」とあるが、カツもフライも「材料に小麦粉をまぶし①、溶き卵②、パン粉③の順に衣をつけ油で揚げる」と調理法は同じである。

なぜ「トンカツ、チキンカツ、ビーフカツ」に対し「エビフライ、カキフライ、アジフライ」なのか。幸いにも、Wikipedia「カツ」の項には「豚カツ」が代表的な料理であり、単に「カツ」と言った場合に「豚カツ」を指す事がある。これは、材料の違いにより「牛カツ」・「チキンカツ」などと呼ばれる揚げ物料理の総称である。材料を魚類とした場合は、フライと呼ばれる事がある。」との記述があり、材料の《海生》と《陸生》の差異により両者の使い分けがなされるという第一次近似を導くことができる。

がしかし、鶏肉は「チキンカツ」、「フライドチキン」さらに「唐揚げ」と三様に表示が変わる。（「とり天」も含め若干の調理法の違いがあり食味やカロリーの違いはある。）さて、

・これから_____を食べに行かない？

という文脈でこれら3つの語を使用した場合どのようなイメージ・コンテクストが想起されるであろうか。筆者の内省は次のようである。「これからチキンカツを食べに行かない？」ではファミレスあたりで皿に盛られたハンバーグやステーキではないカツ料理を食べる姿が、そして「これからフライドチキンを食べに行かない？」ではあの有名なCSおじさんの置物が出迎えてくれるファストフード店に行く、という「外食」の姿がイメージされる。「これから唐揚げを食べに行かない？」はどうか。まずこの文そのものがN. Chomsky 作として有名な（構文論的に適格な）文‘colorless green ideas sleep furiously’とまではいかなくとも「現実世界の意味」という意味では非文法的に近い響きを持つ。筆者にとっては、唐揚定食という複合形式ではなければ、「唐揚げ」はメインとして飲食店に食べに行くものではなく持ち帰りをするあるいは自宅で調理するものだから。

以上の「カツ・フライ論争」は言語学専攻学生を前にした音声と意味の結びつ

きの探求という言語研究へのいざないであったのであるが、それはビジネス即戦力としての活躍を目指すキャリア専攻学生にとってどのような意味合いを持ちうるだろうか。たとえば、外食産業というビジネス世界の側から見れば、そこには消費者の「鶏肉食」に対する需要を「チキンカツ」「フライドチキン」「唐揚げ」などどのような形で掘り起こすかという競争がつきまといっているであろう。そこで重要なことは「チキンカツ」「フライドチキン」「唐揚げ」の語そのもののメタ言語的意味（sense）の差異ではない。それはたとえば、それらの語が用いられる現実世界、小説などのフィクションの世界でもない、という発話環境における商品開発という枠組みでの命名行為などであろう。

コトバの意味の分析は、言語記号—指示（思考）—指示物（事物）のそれぞれを頂点とする三角（形）関係から出発する^[7]。

商品名の命名では、「チキンカツ」や「フライドチキン」や「唐揚げ」などの即自的対象に与えられたレッテルこそがコトバである。そこでの言語に対する態度は自ずと商品の見た目や機能といった要素が加味されたかたちで、「コトバとコトバの意味をなす対象とは一対一の対応をなす」とする実体論的把捉が主流ということになろう。「コトバの意味は同一言語体系内における他のすべての言語記号との関係である」とみるソシュールの純言語学的構造主義的關係論は、ラングあるいはコンピタンスとして、畢竟無意識的に脳裏に潜んでいる。

和辻^[10]にならえば、チキンカツやフライドチキンに限らず食料品全般は家庭の日常必需品あるいは外食産業の消費品等として日常実践的行為の連関のうちに与えられた経験の事実、人間存在そのものの表現であるにとらえられ、それは単なる対象物でもなければ経済学的概念でもない、ということになろう。「チキンカツ」や「フライドチキン」を食する立場（空腹時に目の前にチキンカツがあると想像されたい）からは「チキンカツ」という音声は未だ分節せられた記号ではない。行動的ともいえる音声は指示物（眼前の容器にあるたべもの）から引き離されておらず 言語記号—指示（思考）—指示物（事物）の關係にみられる 指示（思考）をほとんど欠く。これに対して、グルメの話（「グルメ紀行」などのテレビ番組も）をするときのカツ・チキンなどの料理名は指示・思考・蘊蓄を語るメタ言語である。

1.2 言語とルール

人間は社会的動物である。多くの人間が集まり社会を構成することにより個人は生きていくことができ、集団社会がなければ生き続けることは困難である。そして、2人の人間で将棋をするという一時的な小さな結合であっても、その結合が円滑に目的を達するためにはコマの動かし方のようなルールを守ることが必要である^[3]。

わずかな人の作る社会であっても、守らなければならないルールがあり、それがその社会を維持する基礎をなす。合意されたルールに従うことを100%合理的とする点でスポーツは典型的に規範的社会的モデルである^[9]。

そして、ルールはそれ自体が言語的存在である。

ルールを定めた文自体がメタ言語的存在であるにとどまらず、そこで用いられるコトバは行動的象徴である。ルールなければ社会なし、とすれば、社会生活全般が「行動としての言語」として特徴づけられるのである。「行動としての言語」の特徴は「おはよう」「こんにちは」などの挨拶コトバや役所で手順に従って書類交付を受ける際のやり取り（と行動）や訴訟手続きなどシチュエーションとの相関度の強い遂行的（performative）言語活動にみられる。Ogden & Richrdsの図式を会話レベルで考えれば、指示・思考の極は分化されず会話言語記号—シチュエーション（指示物）の関係となることがうかがわれる。このあたりは、通常「おはよう」「こんにちは」には私と汝の交感機能のほかには「思考を語る」などのメタ的指示機能はみられない、ということをもまえての話になる。

このように見てくると、一般人にとっての小説、音楽（ここでは歌詞付としよう）、映画、アニメ、や落語などの文化の娯乐的機能の姿が見える。「指示・思考」レベルでの物語言語行動あるいは比喩行動に娯楽の神髄があるようだ。カラオケ文化はその典型といえるかもしれない。

将棋には私と汝の間にルールという思考体系が存在している。スポーツのゲームはすべてこの図式に従う。私と汝ではないからルールは常に3人称である。Ogden & Richrds流に見れば わたし—ルール—汝 を頂点とする三角形の関係があるといえよう。

2017年度授業では「スポーツ」に触れたのち、法を考える題材として落語「三方一両損」を取り上げた。これは法規の文面や形式に拘泥せず、融通性や機知に富み、人情味にあふれ、公正・明快な裁断を下した名奉行といわれる大岡越前守

忠相の裁判物語に材をとる有名な落語である。物語は、お裁きの一方の当事者となるAがもう一方の当事者となるBの記名入り財布を拾う、というところから展開を始める。現在の遺失物法に照らせば、学校内施設などでの拾得ではないので、まず拾得者Aには遺失者Bに財布を返還もしくは警察（番屋）に届けるという義務が生じる。Bのところへ財布を返還しに行ったAであったがBが受領を拒み逆にAに贈与を申し出ることから双方において「受け取れ、いや受け取らない」という受領拒否の裁判沙汰が生じる。「訴えてやる」という PERFORMATIVE で司法展開がはじまる。話の下りでは、いざござの際の暴行などの刑事的側面は不問に付して裁判官の役割を果たす大岡が自らの一両銭の贈与を申し出て「Aは三両を拾って二両を取得するから一両の損、Bは三両を落として二両の返還をうけるから一両の損、大岡（公儀代理）は三両を預かる（と供託を申し出た）が一両を出して一両の損」と申し渡して一件は落着する。無論これは、当時の奉行は純粹に司法だけにかかわるのではなく行政相談所の窓口的役割を果たす行政官でもあったことを考えれば現行の訴訟法でさだめる正式な手続きに従った司法訴訟などではない。それゆえか大岡裁きをくだらぬとんち話と一蹴していた法学入門書を学生時代に読んだ記憶がある。一方で、伊藤・加藤は「専門家による法の研究も、法の技術性を認めつつも、たんなる形式的論理のみでおしとおし、常識とはなれることとなるならば、悪しき法律家の烙印を押されることになろう。」とし、大岡政談が名裁判として語りつがれるのは「法の形式にとらわれなくて、一般の常識に合致する法の運用をした」からであるとの由を述べている。裁判官やスポーツゲームのレフリーには3人称的立場からのルールの的確な運用という大きな課題が存している。

2. ダイクシス— むすびにかえて

脳裏にある言語体系の中での言語音声と意味の結びつきは時空を離れた「指示・思考」の関係であるが、「わたし」「あなた」「これ」「それ」「あれ」のように時空的場面という要素（指さしのような）により意味が同定される直示語（deixis）という一群の言語記号が存在する。

・今年の留学生は成績が良い。

という「今年の留学生」なども直示表現である。教員間で2017年内（特に入試シー

ズン前)に発せられた「今年の留学生」の場合、これはほとんど2017年4月入学のことを語っていると考えられる。コミュニケーションの不都合も生じないであろう。ところが、年明けて2018年、入試もほぼ終わった時期の「今年の留学生」には発話者の視点軸(トピック)により2017年度生の意味なのかそれとも入試に合格して2018年4月から新たに学業を開始する学生の意味なのか、といった両義性の問題が出てくる。話し手と聞き手で視点軸が共有されていなければコミュニケーションに齟齬が生じる。筆者は特に留学生との会話やメールでは「今度の金曜日に」といった表現を使うにしても必ず〇月〇日というグローバルスタンダードな表現を補うようにしている。

多くのキャリア学部の学生が目指すビジネス社会は文字通り時空的に足場を付けた世界である。様々なレベルでのコミュニケーションがキャリア育成に重要な意味を持つであろう。プロジェクト初期のわずかな視点軸の共有の不具合が次第に大きな障碍となり企業の経営戦略に大きな打撃を与えることが様々な分野で数多く報じられてきた。キャリアパーソンには、実社会における指示・思考レベルのビジョンと指示物(ostensive、直示)レベルでの行動の円滑な連結性が求められるのであろう。さらに、その前提としてあるいは一歩進んで、「時々刻々に移行行く意識現象に対して、移らざる意識の野というものがないかならぬ。(西田幾多郎『場所』)」ということであろうか。

「ヒトの一切の表現は実践的な間柄における主体的な存在の表現である^[10]」とはどういうことか、あらたな公案があたえられる。

大雑把な結文になるが、上にみた「言語記号—指示—指示物 の関係」や「直示」をそれぞれ分析的にとらえるなどはビジネス力の増大にも役立つのではないかという直感を持っている。

参考文献

- [1] 中央教育審議会(2011)今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申) http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf
- [2] 石原千秋(2005) 評論入門のための高校入試国語 日本放送出版協会
- [3] 伊藤正巳・加藤一郎(2008) 現代法学入門 有斐閣
- [4] 国際交流基金(2010)『日本事情・日本文化を教える』ひつじ書房

- [5] Lyons, John (1977) *Semantics Vols. I and II* Cambridge University Press
- [6] 丸山圭三郎 (1983) *ソシユールを読む* 岩波書店
- [7] Ogden, C.K. and Richards, I.A. (1923) *The meaning of Meaning* Routledge & Kegan Paul
(『意味の意味』石橋幸太郎訳1967 新泉社)
- [8] 坂本浩 (2010) 『集中マスター英語長文問題集レベル2 センター・私大標準』 旺文社
- [9] 多木浩二 (1995) *スポーツを考える* 筑摩書房
- [10] 和辻哲郎 (1934) *人間の学としての倫理学* 2007 文庫版 岩波書店